

季節の伝統植物 [夏]

ウリとヒョウタン

国立歴史民俗博物館

ウリとヒョウタン、どちらも果菜類の代表的な植物として世界中で古くから親しまれてきました。果菜とは、野菜の中で果実を食用として利用する植物を指しています。利用の仕方はさまざまですが、利用する部分はおおむね果実に限られています。したがって、ウリもヒョウタンも、その名前から果実の形を思い浮かべる人が多いと思います。

ウリは広い意味ではウリ科という植物学的なグループ全体を指すことがありますが、ここではキュウリ属という小さなグループの中のメロンという1種を呼んでいます。メロンと言えば、近年ではマスクメロンなど、あの丸くて甘い果実がイメージされますが、実際には大小・長短さまざまな果実をつけるものが含まれています。直径2cm程度の小さなものから、長さ1mにもなる長いものまであります。しかも、どのような形をしていても、自由に交雑して子供をつくることのできる特異な植物でもあるのです(図参照)。

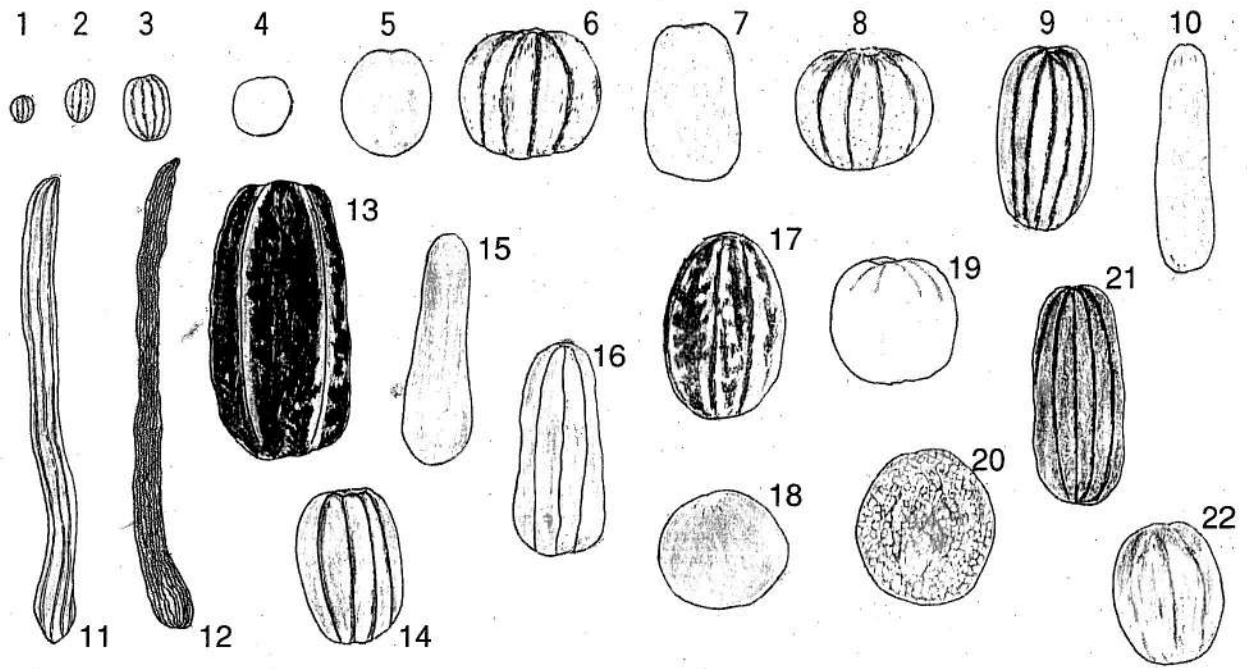
日本でのメロンの歴史は弥生時代にさかのぼります。当時は、果実が小さなザッソウメロンと名付けられるものが主流でした。これらは現在、瀬戸内海や九州の島々に残存しています。古代ではマクワウリが渡来し、普及し始めました。これは中世を経て近世で流行するようになり、生食用のマクワウリ、漬物用のツケウリに分化していきました。特異なのはモモルディカメロンと呼ばれるもので、

平安時代を中心に貴族社会で普及しますが、その後は絶えて、現在では八丈島と長崎県の福江島に残存しています。

一方のヒョウタンは、ふつうは果実を食用とはせず容器に利用するヒョウタン類と、食用が一般的で容器にもするユウガオ類が日本にはあります。日本では、福井県の鳥浜貝塚や滋賀県の粟津湖底遺跡から出土し、約1万年の歴史があります。これは世界の中でもとても古い年代ですが、日本の発掘調査が進んでいるからだと考えられます。ただ、遺跡から出土した遺体はどちらの系統かを区別することはできません。種名としてはヒョウタンで間違いないので、ここでは両類あわせてヒョウタンと呼んでおきます。

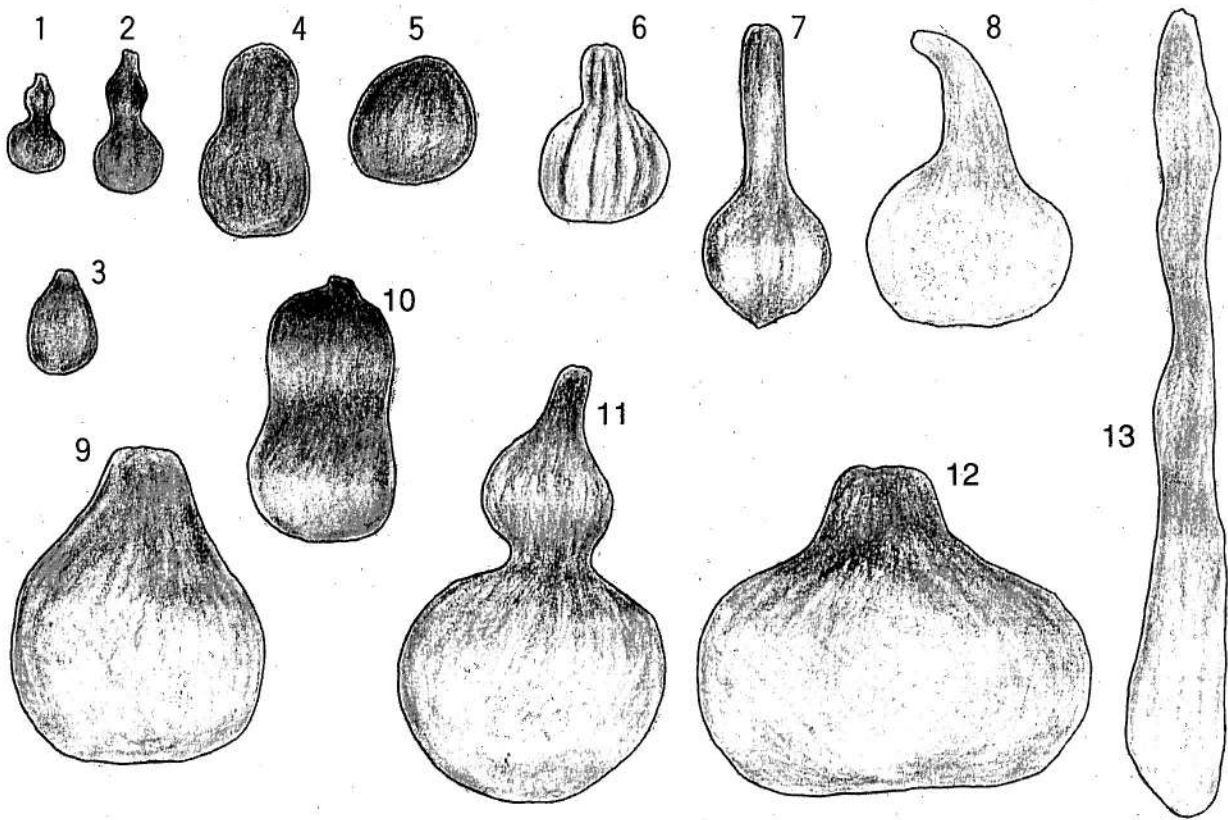
ヒョウタンもまた多様で、大小・長短様々なものが知られています(図参照)。ただ、多くの人が思い浮かべる腰がくびれたヒョウタンは、中世までしかさかのぼることはできません。ヒョウタンの長い歴史の中では、けっこう新しいのです。古代では夏みかんのような球形のヒョウタンが流行し、半分に切ってひしゃくにしていました。

親しみのあるメロンとヒョウタン。しかしその形と歴史は意外な展開をし、これまで語られてきた常識とは違った世界があったのです。



ウリ（メロン）の多様性

1~3. ザッソウメロン 4. コヒメウリ 5. 一口メロン 6. 南部金胡瓜 7. 黄金マクワウリ
 8. ヨーロッパのメロン 9. 甘露胡瓜 10. 白ハグラウリ 11. ヘビウリ 12. チリメンウリ 13. パ
 バゴロシ（モルディカメロン） 14. カモウリ 15. 赤毛瓜 16. シロウリ 17. カワズウリ 18. プ
 リンスメロン 19. 哈密瓜 20. アールス 21. 青縞瓜 22. マドリー



ヒョウタンの多様性

1. 胡蘆（台湾） 2. 一寸豆瓢 3. 小達磨ヒョウタン 4. センナリヒョウタン 5・10. 韓国ヒョウ
 タン 6. 葫蘆匏（台湾） 7・8. ヨーロッパのヒョウタン 9. 大達磨ヒョウタン 11. 中国ヒョウタ
 ン 12. カーリング 13. 大長ヒョウタン